

まえがき

本辞典は、英語の談話標識 (discourse marker) の使い分けを扱ったもので、『英語談話標識用法辞典：43の基本ディスコース・マーカ―』(研究社、2015、JSPS 科研費 15HP5063) (以下『用法』) の姉妹編です。『用法』では代表的な談話標識を43項目取り上げて、各談話標識がもつ機能を中心に用法を記述しました。私たちは『用法』の執筆中に、各談話標識に関してその機能を記述するのとは逆方向の、機能を基準に談話標識を記述することの必要性を感じていました。複数の談話標識が類似の機能をもつのが一般的ですが、使い分けを少しでも明らかにしたいと考えました。『用法』の Appendix II 「談話標識研究の将来展望」で、「外国語学習者としての日本人の立場を活かすならば、本辞典で実践したように、個別の談話標識を実証的に記述してそこから談話標識の機能を割り出し、今度は逆に1つの共通する機能から複数の談話標識を捉え直すことが、英語理解につながると考えられる」(p. 348) と述べました。このような経過を経て、本辞典は生まれました。『用法』の Appendix では、談話標識研究の歩み、談話標識についての基本的な考え方、機能分類も記しています。本辞典と合わせてお読みいただければ、談話標識の全体像が理解しやすくなります。

『用法』と同様に、本辞典も実例の分析を重視して実証的・記述的な手法を取ります。ただし、単なる実例の羅列に終わったり、特定の理論に偏ることを避けて、さまざまな学術的研究の成果も可能な限り取り入れました。対象読者として、英語研究者のほかに英語教師、英語を学ぶ大学生や社会人を想定しています。特に一般の英語学習者は英語の談話標識に関する専門知識があるとは限らないので、学術的研究の成果を前面に出さず、できるだけ分かりやすい説明を心がけました。執筆の際に参考にした資料は、巻末の参考文献を参照してください。

本辞典では、『用法』では扱わなかったコーパスの分析も取り入れまし

まえがき

た。この点に関しては後で述べます。

《談話標識とは》

「談話」とは、ひとつのまとまりをもった発話や文の集まりのことで、話し言葉のほかに書き言葉も含まれます。さらに広く考えると、発話状況などの文脈も含まれます。「談話標識」とは、当該の文脈において、話し手(書き手)の何らかの発話意図を合図することで、コミュニケーションを円滑にする役割を担う一連の語句です。聞き手(読み手)の立場からすると、話し手(書き手)が伝えたいことを適切かつ効果的に理解するための道しるべになります。

談話標識の機能は固定したものではなく、用いられる文脈に応じて変化することがあります。「文脈に応じて生じる機能」が存在することは、談話標識の理解において重要な点です。たとえば談話標識の so は、本辞典では「結果・結論」「会話の開始」「話題転換」「会話を終結へと導く」機能の項目で扱われています。用いられる文脈に応じて、「結果・結論」という中核的な機能から一見すると異なるいくつかの機能が生じています。少し難しい言い方になりますが、意味論的意味から語用論的意味が生じるのです。このような「多機能性」は談話標識の大きな特徴です。なお、多機能性に関しては Appendix I を、代表的な談話標識の機能展開については Appendix II をお読みください。

《コーパス利用について》

コーパスとは話し言葉や書き言葉を大量に集めた言語資料で、コンピュータで検索して調べられるように設計されたデータベースです。コーパスで得られたデータをもとに、言語研究がなされています。世界にはさまざまなコーパスがありますが、今回利用したのは、Corpus of Contemporary American English (COCA) と Corpus of Historical American English (COHA) で、いずれもアメリカ英語を対象にしています。COCA には、1990 年から 2019 年までに出版された約 50 万のテキストで用いられた約 10 億語が掲載されています。テキストには、以下の 8 種類があります。() 内の表記は、本

辞典での略号です。①ブログ (BLOG) ②ウェブページ (WEB) ③テレビ・映画 (TV/MOV) ④口語 (SPOK) ⑤フィクション (FIC) ⑥雑誌 (MAG) ⑦新聞記事 (NEWS) ⑧学術的な文書 (ACAD)。COHA は 1820 年代から 2010 年までを 10 年毎に区切って、小説、雑誌、新聞、ノンフィクションから書き言葉が収集されています。

この 2 つのコーパスから得られた情報を、いくつかの機能項目で Corpus Findings と称した囲みの中に記しています。当該の談話標識使用の時代的変遷では COHA を、用いられるジャンルと発話や文内での位置に関しては COCA を使いました。また、必要に応じて、解説にもコーパスの分析結果を入れていきます。

コーパスからさまざまな有益な情報を多く得られる一方で、その活用には限界もあります。たとえば、談話標識は固定された機能だけではなく、用いられる文脈に応じた機能をもつものがあり、それらは中核となる機能から用いられる文脈に応じて生じます。つまり、文脈をきちんと読み込まなければ談話標識の機能を特定できないということなのです。文脈には、当該の談話標識が用いられる箇所の前後の発話や文も含まれます。出典がオンライン上で公開されていれば、手間をかければ当該の談話標識の機能を特定することは可能です。しかし、公開されていなければ、機能の特定はきわめて困難になります。また談話標識の機能を正確につかむには、話し手と聞き手の関係や発話状況、話し手 (書き手) と聞き手 (読み手) の間で前提となっている一般常識を含むさまざまな知識も考慮しなければなりません。コーパス利用においてはこのような限界があるのは確かですが、それでもコーパスから得られる情報は、当該の談話標識の特徴をつかむのに大いに役立ちます。

なお、コーパス利用に際しては、島根大学外国語教育センターの竹中裕貴氏という心強い同志を得ることができました。氏の献身的なご尽力なしに、Corpus Findings のコーナーを設けることは叶いませんでした。心から感謝申し上げます。

《本辞典の構成》

本辞典の構成は以下のとおりです。

- (1) 談話機能の区分とサブカテゴリー：談話機能を以下の5つに分類し、さらにより細かいカテゴリーに分類する。
 - (ア) 談話構成機能①：先行文脈や後続する発話や文と関わって、談話がどのような構成になっているかを示す。
 - (イ) 談話構成機能②：より大きな単位の談話と関わって、談話がどのような構成になっているかを示す。
 - (ウ) 情報授受機能：情報を受け取ったことと、その情報に対する話し手の態度や感情を示したり、話し手が伝えようとしている情報への理解や共感を聞き手に求める。
 - (エ) 態度表明機能：当該の発話をとおして、どのような態度で自らの見解を伝えようとしているかを示す。
 - (オ) 対人関係調整機能：会話を円滑に進めるために、話し手と聞き手の人間関係を調整する。しばしば聞き手に対する配慮や敬意を示す。
- (2) 見出し語：当該の機能をもつ代表的な談話標識を挙げる。
- (3) **共通する談話機能**：見出し語が共通してもつ談話機能を解説する。
- (4) **使い分けのポイント**：それぞれの談話標識の相違に焦点を当てて、使い分けに関係する特徴を述べつつ例文を挙げる。
- (5) 例文：英米の小説、映画台本などから収集したものを中心とする。原則的に1970年代以降の作品とし、2000年以降の作品を多く取り入れる。当該の談話標識の機能が分かるように、日本語訳の後のカッコ内に説明を加えることがある。**【解説】**と**その他の関連する談話標識**では、必要に応じて英米の辞書や論文などの例文も用いる。
- (6) **【解説】**：主に使い分けに関する情報を提示する。実例から得られた結果を記すが、英米の辞書や語法辞典、学術論文などの資料での裏付けも可能な限り行う。
- (7) **その他の関連する談話標識**：見出し語と類似する機能をもつ談話標識について、例文を挙げて用法を述べる。
- (8) 他所参照：矢印(⇒)の後に参照箇所を示す。『用法』は、『英語談話

標識用法辞典：43の基本ディスコース・マーカー』を指す。その他は、本辞典の参照箇所を示す。

(9) Appendix：談話標識に関する理解を深めるための解説。

Appendix I「談話標識の多機能性と機能展開」：談話標識の特徴である多機能性に関する解説。

Appendix II「代表的な談話標識のさまざまな機能」：代表的な談話標識のさまざまな機能を、例文を挙げて解説。

(10) 見出し語同士の使い分けを明確かつ詳細に記述するのが困難なくつかのサブカテゴリーに関しては、**共通する談話機能**と**使い分けのポイント**で構成する。

『用法』の企画が始まったのは2006年でした。研究社の星野龍氏、三谷裕氏、青木奈都美氏の忍耐強く心強い支援を得て執筆を進め、JSPS 科研費15HP5063の助成を受けて、ようやく2015年に『英語談話標識用法辞典：43の基本ディスコース・マーカー』のタイトルで出版することができました。その後私たちは増え続ける校務に忙殺されたのに加えて、コロナ禍での授業対応や進化し続けるICTに対応した授業や業務に追われながら、本辞典の完成を目指して事例と論文などの資料収集を続けてきました。本辞典は実証的な記述を旨としているので、いかに多くの時間と労力がかかっても、多くの事例を集める必要がありました。各機能項目の第一原稿を1名が担当し、その後著者間で意見交換を行い、記述内容の質の向上に努めてきました。本辞典に取り組んだ時間は、私たちにとって日頃の校務から解放されて、ライフワークとしての談話標識研究の世界に身を置くことができる至福のひとつでした。『用法』に引き続きお世話になった星野龍氏、途中から関わってくださった鈴木美和氏、私たちのあまりにもゆっくりとした歩みに呆れてやきもきされたに違いありません。ここまで私たちを支えてくださったことに、感謝のことばも見つかりません。苦境に立たされる出版業界、特に制作や編集に膨大な労力を必要とする冊子体の辞書の需要が著しく低下する中で、本辞典に関わってくださった研究社のみなさまにも深く感謝申し上げます。また、本辞典の構想段階では『用法』の共著

まえがき

者である廣瀬浩三氏（島根大学名誉教授）のご助力があり、進むべき道筋を示してくださったことを申し添えます。

ことばは生き物、常に変化し、今後も変化し続けます。ある表現が何年も使われているうちに新たに談話標識としての機能をもつようになることもあるでしょう。あるいは、ある談話標識の現在もっている機能が少しずつ変化することもあるかもしれません。そういう意味で、辞書が「完成する」ことは永遠にありません。談話標識の研究は奥深く神秘に満ちた森ですが、そこに分け入って探索する価値があると確信しています。今後の談話標識の研究を、読者のみなさんと若い研究者が引き継いでくださることを願います。

最後に、『用法』の企画を立ち上げて2006年に始まった長い旅に区切りがついた今、辞書作りに情熱をもって取り組んだ人たちを描いた三浦しをんさんの『舟を編む』の一節を引用して締めくくります。

「あかり【明かり】という言葉には、光や灯火^{ともしび}だけでなく、証^{あかし}の意味もある。玄武書房編集部の、十五年にわたる言葉との格闘は決して無為ではなかったと、いまこうして形となって証されたのだった。」
(新潮文庫、2015年)

私たちの場合は、20年にわたる格闘でした。

2025年5月

松尾文子
西川眞由美

目 次

まえがき iii

談話標識の使い分け記述

●談話構成機能①

- 付加・追加 also / besides / moreover / furthermore 1
- 言い換え I mean / in other words / that is (to say) 10
- 真実性・事実性の補強 actually / as a matter of fact / in fact 17
- 前言の主張の正当化 after all / anyway 25
- 対比・逆接 but / however / yet 30
- 譲歩 but / nevertheless [nonetheless] / still / though 37
- 対照 in [by] contrast / meanwhile / (on the one hand ...) on the other hand 47
- 結果・結論 so / then / therefore 51
- 例示 for example / for instance / (let's) say 60
- 情報源 according to / in one's opinion 64
- 類似性 likewise / similarly / equally 66
- 特定化 above all (else) / in particular / especially 68
- 比較 by comparison / in comparison 70
- 一般化 generally (speaking) / in general / on the whole 72

●談話構成機能②

- 順序付け(最初) first / first of all / in the first place 75
- 順序付け(最後) finally / lastly 81
- 注意喚起 look / listen / hey 85

目次

会話の開始	now / so / well	93
話題転換	by the way / so / now / anyway	97
会話の促進	and / oh / so / well	102
会話を終結へと導く	anyway / okay [OK] / so / well	109
談話修正・訂正	actually / at least / I mean	113
時間かせぎ	well / I mean / you know / let's see [let me see]	118
要約	in conclusion / in summary / in sum / to summarize	126

●情報授受機能

理解への期待	you know / you see / you know what?	131
入手情報への感情・態度	oh / ah / well	140
肯定的な評価の表明	okay [OK] / of course	148
確認・念押し	..., huh? / ..., eh? / ..., okay [OK]? / ..., right?	157

●態度表明機能

本音を伝える	frankly / honestly / to tell (you) the truth	161
--------	--	-----

●対人関係調整機能

配慮・敬意	please / if you like / of course	164
垣根言葉	I mean / you know / sort of	169

Appendix I	談話標識の多機能性と機能展開	174
------------	----------------	-----

Appendix II	代表的な談話標識のさまざまな機能	180
-------------	------------------	-----

引用作品	194
------	-----

参考文献	196
------	-----

索引	204
----	-----

真実性・事実性の補強

actually / as a matter of fact / in fact

共通する談話機能

いずれの談話標識も「真実性・事実性の補強」を表す。「真実性・事実性の補強」には2つのタイプがあり、前言から予想される内容に反する情報を提示して、自分の主張の真実性や事実性を補強する場合と、より詳しい具体的な情報を付け加えて前言を明確化・正当化して、自分の主張の真実性や事実性を補強する場合である。

使い分けのポイント

actually 前言から予想される内容に反する情報を提示する場合に多く用いられる。書き言葉より話し言葉で圧倒的に多用される。通例コンマを伴い、文頭、文中、文尾のいずれでも使用可能であるが、この用法では文頭が最も一般的。一般的に正式なスピーチや書き言葉では避けた方がよいとされるが、自分の主張点を際立たせるなど重要な事柄を効果的に伝えることができる。ただし、使いすぎると話し手の自信のなさを示唆することがあるので注意が必要。

- ▶ “666?” Langdon smiled. “*Actually* it’s 503.” —Brown, *Angels* [記号が数字に置き換えられている状況で、数字に言及し]「666なの?」ラングドンは微笑んだ。「実は、503なんだ」(相手の予想に反する主張)
- ▶ “He’d kill me,” she replied. She smiled curiously. “*Actually*, he did try to kill me in a way — after our last row.” —Horowitz, *Magpie* [交際中の男性について言及し]「(別れたら)殺されちゃうわ」と彼女は答えて、妙な笑みを浮かべた。「実際、彼はある意味本当に私を殺そうとしたのよ。最近の言い争いの後だね」(前言の事実性を正確に補強)

as a matter of fact 通例、相手に関心を持っているだろうと話し手が考えている情報を提示する。matter-of-fact (事実に即した) のニュアンスを反映して、話し手は自分の主張に自信を持っていることを示す。話し言葉で as を省略するのはくだけた言い方。通例コンマを伴い、文頭、文尾で用いられ、文中での使用頻度は極めて低い。

- ▶ “Commerce is not a sin. Trading with emerging countries is not a sin. Trade helps them to emerge, *as a matter of fact*. It makes reforms possible. [...]” —le Carré,

Gardener [あなたは英国の企業の利益を代弁しなくてはならないと言われたナイロビ英国高等弁務官事務所長が]「商業活動は罪じゃない。新興国との貿易も罪じゃない。貿易は彼らが豊かになる手助けとなるんだ、実際のところ。改革が可能になる。[…]

- ▶ FIRST LADY: Hi, it's me. PRESIDENT: Hi. What time is it there? FIRST LADY: It's two forty-five in the morning. I know I didn't wake you. PRESIDENT: *As a matter of fact*, you did. —*Day* [映] [電話で] ファーストレディ: もしもし, 私よ. 大統領: やあ. そっちは何時だい? ファーストレディ: 午前2時45分よ. あなたを起こしたりしなかったと思うけど. 大統領: 実を言うと, 起こされたね. (相手の否定を覆す主張)

in fact より詳しい具体的な情報を提示する場合に多く用いられる. 通例コマを伴い, 文頭で用いられるが, 文中や文尾でも使用可能.

- ▶ “[…] Donnie knows your name now, which means he knows where you live. *In fact*, he's probably keeping an eye on this place already.” —Swanson, *Girl* “[…] ドニーは今ではあなたの名前を知ってる. どこに住んでるか知ってるってことよ. それどころか, もうここを監視してるわ”(詳細な情報提供による補強)
- ▶ “She loves this island. *In fact*, it's very hard to get her to leave it . . . even for holidays.” —Horowitz, *Line* 「妻はこの島が大好きなんです. 実際, この島を離れさせるのはとても難しいんだ. たとえ休暇のためであってもね」(別の観点からの補強)

(⇒ ACTUALLY: 『用法』 pp. 2-13; AS A MATTER OF FACT: 『用法』 pp. 147-148; IN FACT: 『用法』 pp. 142-149)

《Corpus Findings》

【時代的変遷】 使用頻度は, *actually* は1900年代以降右肩上がりが高くなっているが, *as a matter of fact* は, 1960年を境に大きく低下している. *in fact* は1970年代をピークに低下し始めている. [COHA]

【主な使用域】 使用頻度は, *actually* はTV/MOV, SPOK, FICの順で, *in fact* はSPOK, BLOG, WEBの順で, *as a matter of fact* はSPOK, TV/MOV, FICの順で高くなっている. [COCA]

【位置】 いずれも文頭での使用が圧倒的に多いが, *actually* は文尾でも比較的多く用いられている. 文中については, *actually* と *in fact* は一定の使用頻度があるが, *as a matter of fact* は頻度が極めて低い. [COCA] (竹中)

【解説1: 前言との意味関係における actually と in fact の違い】 in fact は前言の内容を補強するのに用いられる傾向があるのに対して, actually は相手の予想に反する内容を提示し, 前言との関係については幅広く用いられる [Smith & Jucker, p. 214]: A: It is raining. B: *In fact*, it is pouring / *drizzling / *snowing. / A: It is raining. B: *Actually*, it is pouring / drizzling / snowing. A: 雨が降ってる. B: いや, 土砂降りだよ / 霧雨程度だよ / 雪が降ってるよ. pouring では前言の raining を強め, drizzling では弱め, snowing では「雨ではなく雪が降っている」と言っている.

【解説2: 文尾の actually と in fact ①】 actually は, 前言の主張の真実性や事実性を補強する場合に文尾で用いられると, 断定を念押しするニュアンスが生じる [Haselow 2012, p. 199]. in fact にも同様の用法があるが, actually ほど使用頻度は高くない: “[...] Do you have a problem with that?” “Yes, I do have a problem with that, *actually*. A very big problem.” —Horowitz, *Word* “[...] そのことで何か問題でもあるのか?” 「あるさ. それについては問題がある, 当然だ. 大問題だ」/ “Fine, but the prehistoric ocean never had giant bugs.” “Sure, it did. And it still does, *in fact*. People eat them everyday. They’re a delicacy in most countries.” —Brown, *Deception* 「(水中では重力が小さいので, 陸上では生き延びられない大きな体を海が支えているのは) 確かにそうだ. でも, 太古の海に巨大な虫などいなかったよ」 「いや, いたんだ. それに, 今もいるよ, 実際に. みんな毎日食べている. ほとんどの国ではごちそうだ」 (⇒ ACTUALLY: 『用法』 pp. 11–12)

【解説3: 文尾の actually と in fact ②】 一方で, actually は文尾で用いられて話し手の主張を弱める機能もち, 話し手と聞き手の見解の不一致を和らげる. この場合, I think, I mean などと共起することがある [Aijmer 2013, pp. 114–115; Haselow 2012, p. 198]. 特に会話では, 会話者間の友好的な関係を維持する機能をもつが, 真実性を強める力は actually よりも in fact の方が強いので, この用法では actually の方が多く見られる [Aijmer 2013, pp. 89–90; Traugott and Dasher, p. 173]: “Claire had introduced you to him?” “I think it was the other way round, *actually*, Ms Ryeland. He needed help with his books and so she introduced him to me. [...]” —Horowitz, *Magpie* 「クレアがあなたを彼に紹介したのでしょうか?」 「逆だと思えますけど, ミズ・ライランド. 彼は自分の本のことで助けが必要だったので, クレアが彼を私に紹介したんだ. [...]」

相手の発言の一部を訂正する場合, actually が訂正後の表現の直後で用いられることがある. actually なしで言い切るより, 相手に配慮した形になる. この用法では, as a matter of fact と in fact はあまり用いられない: “I like your car.”

“Thank you.” “It’s an MG.” “An MGB, *actually*.” —Horowitz, *Magpie* 「いい車ですね」「ありがとう」「MG ですね」「MGB なんだけどね」(⇒ ACTUALLY: 「談話修正・訂正」, 『用法』 pp. 10–11)

【解説 4: 丁寧表現の *actually* と *in fact*】 *actually* によって、聞き手の考えや期待に反する、多くの場合、好ましくないことを伝えることをあらかじめ合図するので、丁寧表現となる。しばしばためらいや思案を表す *well* や *I think* などの垣根言葉と共起する。申し出や許可願などを断ったり、相手の発言を訂正する際にも用いられる [Aijmer 2002, pp. 268, 275; COB³; CLAD³; OALD¹⁰]: MICKEY: Is she, um, well, is she gettin’ good treatment over there? THOMPSON: *Well, actually, it’s . . . yes. Well, it’s by no means bad. But . . .* —*Verdict* [映] ミッキー: 彼女は、そのう、そこできちんとした治療を受けていますか? トンプソン: ええ、実のところ、まあそうですね。決して悪くはないですね。でも……。 (⇒【解説 7 (1)】)

次例では、*Well, actually* だけで気遣いを示しつつ相手の期待に反することを述べようとしている: “[...] I am sure you are familiar with my work.” “*Well, actually* —” —Horowitz, *Sentence* “[...] きっと私の作品をご存じでしょうね」「いや、実のところ——」

一方、*in fact* は *actually* と比べて権威的なニュアンスを伴ったり、表す真実性がより高い傾向があるので、*actually* ほど丁寧表現として用いられることは多くない。(⇒ ACTUALLY: 「談話修正・訂正」, 『用法』 pp. 4–5, 10–11; WELL: 「入事情報への感情・態度」【その他の「配慮・敬意」の談話標識】)

【解説 5: *actually* と *as a matter of fact* のニュアンスの違い】 *actually* は、聞き手志向の表現で、相手に対する気遣いを示すのに対し、*as a matter of fact* は、話し手志向の表現として機能し、話し手が自信をもって自らの意見を述べる押しの強い表現になる傾向がある。したがって、*as a matter of fact* が相手の発話内容を否定する応答で用いられると、相手の意見との相違を際立たせるようになることが多く、通例、疑問文では用いられない [Schourup & Waida, pp. 147, 162]: “You can make any accusations you like. But you can’t prove anything.” “*As a matter of fact, I can, Martin.*” I countered. “I can prove one hundred percent, without any doubt at all, that you did *not* kill Frank. [...]” —Horowitz, *Moonflower* 「好きなだけ言いがかりをつけられるでしょう。でも、あなた方は何一つ証明できない」「いや、それができるんですよ、マーティン」と私は反論した。「100%、何の疑いもなく、あなたがフランクを殺していないことを。[...]」。 *actually* の例は (⇒【解説 4】)。

【解説6: 命令文での actually と in fact】 actually は、通例、命令文では用いられないが、追加陳述的に前言を取り消す場合には可能。次例はたとえば、「金曜日に電話してくれないか」と告げていたにもかかわらず、別れ際にそれを訂正するような場合に自然な発話となる [Schourup & Waida, pp. 46-47]: *Actually, give me a call Thursday.* いや、やっぱり木曜日に電話してくれないかい。

in fact では、「……と言ってるんだ」の意で命令を強める: “Don’t you ever, ever do that again,” Macon told her. “Huh?” “*In fact, don’t even bother coming again.*” —Tyler, *Tourist* 「ああいうこと (= 飼い犬の首輪の皮紐をつかんで犬をぶら下げること) は2度としないでくれ」とメイコンは彼女に言った。「えっ?」[2度と来てもくれるなど言ってるんだ] (⇒ ACTUALLY: 『用法』 pp. 7-8; IN FACT: 『用法』 p. 145)

【解説7: 他の談話標識との共起関係】 補強内容、または補強する際の話し手の心的態度や相手に対する配慮によって、他の談話標識と共起する。特徴的なものとして、actually は well, but と、in fact は but と共起する [Aijmer 2013, pp. 88, 112, 124].

(1) well との共起 聞き手にとって予想外のことや言いにくいことを述べる際に、ためらいや熟慮を表す well と共起して、相手への配慮を表す。as a matter of fact の場合は、well によってためらいがちな発話から自信のある主張に切り替えられていく: “[...] I myself made the journey only yesterday and it was an undertaking of a great many hours. Three trains. And the British Rail sandwiches! They were not good.” “*Well, in fact, I drove down. [...]*” —Horowitz, *Moonflower* 「[...] 私もつい昨日 (ロンドンから) やって来たんですが、何時間もかかる大仕事でした。列車を2回乗り換えて。それに、あの英国鉄道のサンドウィッチ! あまりお勧めできませんな」[あの、実は、私は車で来たんです。 [...]]/JACK: Hey. Answer me. TESS: *Well, I, uh, as a matter of fact, am gonna see Trask himself tomorrow. [...]* —*Girl* [映] ジャック: さあ、答えてくれ。テス: あのう、私、そのう、実は、明日 (社長の) トラスクさん自身に会うつもりなんです。 [...] [uh の使用に注意] actually の例は (⇒【解説4】)。 (⇒ WELL: 「入手情報への感情・態度」【その他の「配慮・敬意」の談話標識】)

(2) but との共起 but と共起して、聞き手の予想や期待に反することを述べることを強調する [Aijmer 2013, p. 103; 2002, p. 267]: RICHARD: Just a minute, Mr. Krahulik. I would like to explain this. This may seem unusual to you, *but actually, it’s the most natural thing in the world.* —*Itch* [映] リチャード: ちょっと待った、クラフリックさん。状況を説明したいんだ。変だと思ってしまうかもしれないが、実はこれ (= 妻子の留守中に女の子を部屋に入れること) は、世間ではごく普通のことな

結果・結論

so / then / therefore

共通する談話機能

いずれの談話標識も前言で述べられる出来事などの「結果」や、前言から導き出される論理的な、あるいは推論される「結論」を表す。談話の中では、話し手自身が述べた前言から「結果・結論」を導く場合と、相手の発話を受けて、その「結果・結論」を述べる場合に用いられる。

使い分けのポイント

so 3語の中では最も頻度が高く、一般的な語。前言で述べられる事柄や状態から生じる結果を表す。また、前言から導き出される論理的な結論や推論される結論を表す。常に文頭で用いられる。この用法では、通例、コンマは伴わない。

- ▶ “[...] NASA no longer plays a critical role in the lives of everyday Americans and yet we continue to fund them as though they do.” “So you don’t think space is the future?” —Brown, *Deception* 「[...] NASA はもうアメリカ人の日常生活で重要な役割を果たしていないのに、我々は彼らが役立っているかのように資金を投入し続けているのです」「ということは、宇宙に未来はないというお考えなのですか？」(先行発話から導き出された結論)
- ▶ “This is my first copy of *The Catcher in the Rye*. Got it from my father’s estate twenty years ago.” “So you have two copies of it?” “No, I have four.” —Grisham, *Camino* 「これは私が持っている1冊目の『キャッチャー・イン・ザ・ライ』なんだ。20年前に父親の家から持って来た」「じゃあ、2冊持ってるってこと?」「いや、4冊持ってる」(先行発話から推論される結論の確認)

then 前言で述べられる事柄や状態から生じる客観的な結果や主張を表す。また、前言で述べられる不確かな内容や条件などから導き出される論理的な結論や推論される結論を表す。文頭か文尾で用いられ、くだけた話し言葉では文尾で多く用いられる。この用法では、通例、コンマは伴わない。

- ▶ “[...] Do you know to what she was referring?” “I have no idea.” “Then I will tell you. [...]” —Horowitz, *Magpie* 「[...] (殺された女性が日記に書いていたことが)「何のことなのか分かりますか?」「いや、分からないね」「それなら、私が話しましょう [...]」(先行発話の内容から判断した結果としての次の行動)

- ▶ “Are you an actor too?” I asked. “Yes. Well, I was. That’s how we met. We were at RADA together. He played *Hamlet*. [...] I was Ophelia.” “You’ve been together for a while, *then*.” —Horowitz, *Word* 「あなたは俳優なんですか？」と私は尋ねた。「ええ。まあ、以前はね。それで私たちが出会ったの。RADA (=王立演劇学校) で一緒だったの。彼は『ハムレット』を演じてね。[...] 私はオフィーリア役だった」「それじゃあ、結構一緒にいたんだ」(先行の発言から導き出される結論)

therefore 前言から導き出される論理的な結論を表す。書き言葉では学術文などの堅い言い方で好まれる、話し言葉では裁判などの形式ばった場面で好まれ、くだけた場面では用いられない。通例、コンマを伴い文頭や文中で用いられるが、文中ではコンマを伴わず用いられることがある。文尾ではまれ。

- ▶ DR. TOWLER: She threw up in her mask. CONCANNON: *Therefore* she wasn’t getting oxygen and her heart stopped. —*Verdict* [映] [法廷で] タウラー博士: 彼女はマスクに吐きました。コンキャノン: ということは、だんだん呼吸できなくなり心臓が止まったということになります。(相手の発話から導く結論)
- ▶ “No. It is a different reason. I have broken the confidentiality clause, *therefore* I have broken my contract. It is logical.” —le Carré, *Gardener* 「いいえ。(彼らが私にお金を払わないのは) 別の理由からよ。私は守秘義務に違反した。だから契約を破棄したの。筋は通ってるでしょ」

(⇒ so: 『用法』 pp. 200–212; THEN: 『用法』 pp. 89–100; THEREFORE: 『用法』 pp. 210–211)

◀Corpus Findings▶

【時代的変遷】 so は 1900 年代から使用頻度は上昇傾向があるのに対して、then は 1940 年代から少しずつ下がり始めるが、文尾では大きな変化は見られない。therefore は年代とともにずっと低下し続けている。[COHA]

【主な使用域】 使用頻度は、so は SPOK, WEB, BLOG などが高く、then は FIC, TV/MOV や MAG で高い。therefore は ACAD での使用が圧倒的に多く、次いで WEB, BLOG の順に多い。[COCA]

【位置】 so は文頭のみ、then は文頭での使用が多いが、文中、文尾でも用いられ、therefore は文頭の使用が圧倒的に多く、文中でも一定の使用頻度があるが、文尾ではまれ。[COCA] (竹中)

【解説 1: 発話の場面を受ける so, then と therefore】 so は先行する具体的な発話がない場合でも用いられ、発話の場面の状況などから推測して得られる結

論を述べる。次の2例目のように、話し手が今、何かを発見したというニュースで用いられ、感嘆符を伴うことがある：The policeman looked at Charlie and Charlie smiled back. “So you know about the robbery?” queried the man. —Freemantle, *Clap* 警官がチャーリーの方に目をやると、チャーリーは微笑み返した。「じゃあ盗難事件のことはご存じなんですね」と警官は尋ねた／“So here you are!” Josie suddenly filled the space before me. —Ishiguro, *Klara* 「ああ、こんな所にいたんだ！」ジョージの姿が突然、私の目の前に現れた。

then では、発話の場面から得られる情報を言語的情報として解釈し、結論・推論が述べられる。次例では、2人のうなずきによって“Yes, we have.”が暗示され、その発話に相当する状況を根拠に推論している：“Have you seen this video?” Kyle asked. Both nodded. “Then you know I didn’t touch the girl.” —Grisham, *Associate* [ある女性がレイプされたと主張している証拠となるビデオに言及して]「そのビデオを見たのか？」とカイルが尋ねると、(捜査官の)2人ともうなずいた。「じゃあ、僕がその子に触れていないことが分かるだろ」

一方、発話の場面を受ける therefore は容認度が下がる [Blakemore 2002, p. 166]: [speaker looks in his wallet and finds a £5 note] So / ?Therefore I didn’t spend all the money. [財布に5ポンド札を見つけて] ということは、全部使ったわけじゃないんだ。(⇒ so: 『用法』 pp. 203–204; THEN: 『用法』 p. 94; THEREFORE: 『用法』 p. 210)

【解説2: So (what)?, Then what? と Therefore (what)?】 so では、So?あるいは So what? の形で相手の発話を切り返し、「それがどうしたというのだ」の意を表したり、相手の発話の真意を尋ねる。So what? は下降調で発音される。やや無礼な言い方となり、相手の発言に対して異議を唱えたり、詰問調になったり、相手が話したことはそんなに重要ではないという含意がある [Ball, p. 103; Bolden 2009, p. 976; CLAD³; LD⁶; MED³; OALD¹⁰]: “My name is Mitch McDeere. I’m a lawyer from Memphis.” Abanks glared at him with tiny brown eyes. Mitch had his attention. “So?” “So, the two men who died with your son were friends of mine. It won’t take but a few minutes.” —Grisham, *Firm* 「僕の名前はミッチ・マクディーア。メンフィスから来た弁護士です」エイバンクスは小さな茶色い目でミッチを睨みつけた。うまい具合に、この男の注意を引けたらしい。「それで?」「それで、息子さんと一緒に亡くなった2人の弁護士は、僕の友人なんです。ほんの数分で話は終わりますから」[相手の発話を促す so を so で受けていることに注意] / Ty: Are you Republican? CHRIS: Yes. JERRY: Why? Ty: Richard Nixon was Republican. JERRY: So what? Ty: He lied. JERRY: So, what does that mean? Ty: Nothing. —Maid [映] タイ: あなたは共和党員? クリス: そうさ。ジェリー: なぜ? タイ: リチャード・ニクソンは共和党員だったからさ。ジェリー: だからどう

入手情報への感情・態度

oh / ah / well

共通する談話機能

いずれの談話標識も、たった今何らかの情報を受け取ったこと、また受け取った情報に対する話し手の「感情」や「態度」を伝え、そうすることで後続する発話の解釈を話し手の意図した方向へ導くために頻繁に用いられる。イントネーションによっても、多様なニュアンスで話し手の心の中で起こっている状況を伝える。さらに、そのような心情をさりげなく自然に伝えることにより、しばしば丁寧さを示すなど対人関係面でも戦略的に用いられる。

使い分けのポイント

- oh** たった今受け取った情報が予期せぬものであると同時に、重要であるとか、ありがたいなど、話し手にとって何らかの価値をもつものであることを示す。
- ▶ “How’s Kemal?” Dana hesitated. “At the moment, I’m afraid there’s a problem.” “Oh? What kind of problem?” “Kemal was expelled from school.” —Sheldon, *Sky* 「ケマルは元気でやってる？」ダナはためらいがちに言った。「実は今問題を抱えてるの」「えっ？ どんな問題？」「退学になったのよ」（予想外の情報に対する懸念）
 - ▶ “What was her reaction?” “Oh, she liked to make him jealous. It seemed to make her feel good. [...]” —Clark, *Sweetheart* 「（彼女の浮気相手から夫と別れろ、他の男と付き合うなど言われて）彼女の反応はどうだった？」「何と、彼女は自らその男に嫉妬させてたんだ。嫉妬されると気分が良くなったらしいよ。 [...]」
- ah** たった今受け取った情報が、すでに心の中に存在する想定と結びついたことを示す。また、ふとしたことで心に抱いていたことを想起した場合に用いられる。
- ▶ WIFE: Well, he has created a monster. He is exactly like him. HUSBAND: Ah, here we go again. It’s the same old story. —Sam [映] 妻：ええ、この人が怪物を作り出したんです。あの子はこの人に何もかもそっくり、夫：ああ、また始まった、カビの生えたような同じ話がね。（過去の妻の言動を思い出しつつうんざり感を示唆）
 - ▶ William returned to the offices of Cohen, Cohen and Yablons seven days later. “Ah, Mr. Kane,” said Thomas Cohen, “how nice to see you again. Would you care

for some coffee?” —Archer, *Kane* ウィリアムは7日後にコーヘン・コーヘン・アンド・ヤブロンズのオフィスを再び訪ねた。「ああ、ケインさん」トマス・コーヘンは言った。「またお会いできて嬉しいです。コーヒーでもいかがですか?」(ウィリアムの再訪を予期していた)

well 受け取った情報に対して即座に適切な返答が出来ず、話し手がまだ何かを考えている状態であること、あるいはどのような言葉で返答すべきかを模索していることを示す。相手の発話内容に対する懸念や、話し手がこれから述べようとする内容や述べるという行為自体へのためらいを伝える場合にも用いられる。

- ▶ WILLIAM: What are the choices? SPIKE: *Well* . . . wait for it . . . First there's this one. —*Hill* [映] [デートに来ていくTシャツを探しながら] ウィリアム: どののがあるんだい? スパイク: えーと……ちょっと待っててくれ……。まずこれが1つ目だ。(慎重な応答を示唆)
- ▶ “You want to write about a murder that happen before we met?” “*Well*, you said it would be a good idea. [⋯]” —Horowitz, *Death* [我々が会う前に起こった殺人事件について書きたいのか?][そんなこと言っても、君がいい考えだと言ったんだろ。[⋯]](相手の言動に対する当惑感を示唆)

(⇒ OH: 『用法』 pp. 230–240; AH: 『用法』 pp. 214–220; WELL: 『用法』 pp. 260–266)

◀Corpus Findings▶

【時代的変遷】 ohの使用頻度は、1930年代に一挙に高まり、1960年代をピークに若干下がってきているが2010年代には少し上がっている。ahは、ohよりずっと頻度は低く、1880年代をピークとして1920年代まで下がり、1930年代から回復したものの、1960年代より少しずつ減少している。なお、2010年代では、若干増加の傾向が見られる。wellは、ohより若干頻度が低いが、ohと類似した頻度の変化が見られ、1930年代に大幅に増加し、1960年代をピークに、2010年代まで少しずつ減少してきている。[COHA]

【主な使用域】 ohは、圧倒的にTV/MOVが多く、次にFIC、そして大きな差があり、SPOKの順になっている。ahはTV/MOV、FICが多く、大きな差がありWEBの順になっている。wellは、ohと同様にTV/MOVにおける使用が極めて多く、ほぼ同様の頻度でFIC、SPOKの順となっている。[COCA]

【位置】 いずれも文頭での使用が圧倒的に多いが、文中でも多く用いられる。なお、文中については、ohとahは、全体頻度の15%程度あるのに対して、wellは60%近くになっている。文尾については、連続して用いられる場合

や途中で発話を止めてしまうような場合を除いて、通例、用いられない。oh, ah, well のいずれにおいても単独で現れることも多い。[COCA] (竹中)

【解説 1: oh, ah, well が伝える感情や態度】 oh は認識した情報や接した状況が想定外でかつ重要なものであることから来るさまざまな感情や態度を表す。ah は特に安堵や喜びの気持ちを表すことが多い。well は受け取った情報に対して、「すぐに返す言葉が見つからない」といった話し手の不十分な状況を伝えるが、基本的にはためらいや懸念といった心情を伝える：TESS: *Oh!* This is so tiny and cute. I love it. *Ah.* Feels so good to be home. Six months away feels like forever. —*Dresses* [映] テス：あら。ここはとてもこじんまりして素敵ね。とても気に入ったわ。ああ、やっぱり故郷っていいわね。6 カ月離れていただけなのにすごく長く感じる [oh と ah の使い分けに注意] / “I’ve heard lots of rumors,” he began softly. [...] “What kind of rumors?” she asked stiffly. “*Well,* I’ll be very honest, Nora,” he said, leaning even lower and closer. “I hear it from a good source that you and Luther have decided not to observe Christmas this year.” —Grisham, *Christmas* 「たくさん噂話を聞いているのですが」と彼 (= 牧師) は穏やかな口調で始めた。[...] 「どんな噂でしょうか？」彼女はよそよそしい態度で尋ねた。「あのう、率直に言わせてもらいますがね、ノーラ」彼はさらに腰をかがめて顔を近づけながら言った。「信頼できる筋の話では、あなたと(夫の)ルーサーは今年はいつものクリスマスのやり方を守らないと決めたそうですね」(⇒ OH: 『用法』 pp. 234-235; AH: 『用法』 pp. 215-217; WELL: 『用法』 p. 262)

【解説 2: 依頼や提案、いとまごいに用いられる oh, ah, well】 oh は、突然重要なことに気づいたかのように、ah は忘れていたことを思い出したかのように依頼などを導入し、自然でさりげない態度を伝える。well は熟慮の末に依頼などを導入する時に用い、慎重な態度を伝える：MIA: *Oh, well,* I have to go. —*Princess* [映] ミア：あら、ええっと、もう行かなくちゃ [well との共起に注意] (⇒ 【解説 8】) / KEVIN: *Ah, well* look, I wanna make it up to you, okay? How about a new datebook or maybe just a date? —*Dresses* [映] ケヴィン：ああ(そうだ)、ところで、埋め合わせしたいんだけど、いいかな？ 新しいスケジュール帳か、それともデートなんかどう？ [well との共起に注意] (⇒ 【解説 8】) / KEVIN: [...] *Well,* would you . . . Have a drink with me. Yeah? —*Dresses* [映] ケヴィン：[...] あのう、一緒に一杯飲まない。いいだろ？ / “Why would you want to?” “To get his side of the story.” Hawthorne shook his head. “You don’t need it. You’ve got mine.” His voice was bleak. He was warning me not to argue. “*Well,* at least tell me this. How did you meet him?” —Horowitz, *Death* 「なぜ彼に会いたいんだ？」「彼

の立場から話を聞くためにだ」ホーソンは首を横に振った。「そんな必要はないね。僕の話の聞けばいい」彼の声は冷たかった。これ以上議論するなどと警告していたのだ。「うーん、せめてこれだけは教えてほしい。どうやって彼と知り合ったんだ？」(⇒ OH: 【その他の「配慮・敬意」の談話標識】、『用法』 pp. 232-233; AH: 『用法』 pp. 215-216; WELL: 【その他の「配慮・敬意」の談話標識】、『用法』 p. 263)

【解説 3: 話題転換で用いられる oh, ah, well】 oh は突然新しい話題が頭に浮かんだことを強調し、自然でさりげない話題転換を可能にする。ah は既に頭の中にあった話題を突然思い出したものとして導入する。well は考えた結果の慎重かつ計画的な話題転換であることを伝える: JANE: Hey, you haven't seen my Filofax anywhere, have you? I can't find it. GINA: No. JANE: No. Okay. I'll go look for it. *Oh*, did you get those catalog pages in for George? He wants to see them first thing this morning. —*Dresses* [映] ジェーン: ねえ、私の手帳どこになかった? 見当たらないの。ジーナ: いいえ。ジェーン: そう、分かった。自分で探すわ。あっそうだ、ジョージに見せるあのカタログ原稿届いてる? 今朝一番に見たいらしいの。/ NICK: You have a boyfriend? You're only thirteen years old. ALEX: Am I? I thought I was fifteen. NICK: We're gonna be fine. ALEX: *Ah*, look. I'm gonna meet Cameron. Is it okay if I meet dad back at this place? —*Women* [映] ニック: ボーイフレンドだって? まだ 13 歳じゃないか。アレックス: はあ? わたしもう 15 歳よ。ニック: 楽しくやろうな。アレックス: あっ、そうだ、キャメロンに会うことになっているの。あとでパパのアパートに行くわ [話題転換を示す look との共起に注意] / WILLIAM: Hello. ANNA: You disappeared. WILLIAM: Yes, I'm sorry. I had to leave. I didn't want to disturb you. ANNA: *Well*, how have you been? —*Hill* [映] ウィリアム: こんにちは。アナ: (前は)突然いなくなっちゃったでしょ。ウィリアム: そう、ごめんね。帰らなくちゃならなかったんだ。邪魔したくなかったしね。アナ: ところで、あれから元気だった? (⇒ OH: 『用法』 p. 238; AH: 『用法』 p. 216; WELL: 『用法』 pp. 262-263)

【解説 4: 同意・不同意を表明する oh と well】 oh は相手の発話内容が重要かつ想定外であることを強調することで、強い共感を伝える。また、異論を唱える前に相手の発話内容の重要性を強調しておくことで、配慮を伝える。well は熟慮の末の反論ということで慎重さを示し、反論することへのためらいを示しつつ相手に対する配慮を表すこともある: “What do you think will happen to it?” “No idea, really. For all I know, Miranda will finish it and move up here.” “*Oh*, she'll definitely move up here.” —Swanson, *Kind* 「これからその家はどうなると思う?」 「知らないな、まったく。分かっている限りでは、ミランダは(建設中の)家を完